

みんぱくにおけるフィジー語の演劇パフォーマンス

丹羽 典生（国立民族学博物館）

本発表では、国立民族学博物館で上演されたフィジー語によるパフォーマンスについて紹介する。

日本においてフィジー語で上演するという試みがなされたのは、偶然の重なり合った結果である。まず国立民族学博物館において全館あげての展示の改修があり、2011年にオセアニアセクションがその対象となっていたこと。そして改修後にそのプロモーションをするためのイベントが求められていたことが指摘できる。また同じ時期、アポロニア・タマタがフィジー語での劇作と上演に関心を抱き、ちょうどフィジーの伝統文化とその変容を題材とした三部作の一作目（『ラコビ』）が終了し手ごたえを感じていたこと。そしてまた発表者がアポロニアの元学生で、上記の文化イベントで何かできないか相談をもちかけたことがある。

ドラマは、フィジーで3つの丘をもつ島（ナイガニ）がどのようにして生まれたかという創世神話と呼ばれるジャンルである。特定の河や島の成り立ちの起源についてのお話（tukuni）はフィジー各地に存在している。本作品はそうした創世神話にアポロニアの想像が結びついて生み出されたものである。

登場人物は、語り手兼産婆役の老婆1名のほか、5名（王、王妃、王子、村娘そして王子の陰の分身である道化）で構成される。王子と村娘がよからぬ関係にあると勘違いをした王と王妃は、村娘を村から追放した。失意の娘は、土を盛った籠（3つに中が分かれている）を背負って天空に飛び立つ。娘を引き留めようと王子（とその分身である道化）が投げた槍は籠に当たり、その籠からこぼれ落ちた土から3つの丘をもつ島が産み出された。

上演はフィジー語で行われた。ほとんどの観客がフィジーについてなじみのない日本人であるため、幕間ごとにシーンの展開を前もって説明するという形式をとった。また、劇の内容自体にもそうした観客を念頭に置いた工夫がなされた。たとえば言葉がなくてわかりやすく、客の目を引くような踊り、アクション、歌などの要素が積極的に盛り込まれた。

上演後に回収された観客のアンケート結果をみるかぎり、ストーリーの大枠はとりあえず伝えられたと理解している。しかし同時に、上演時の客のリアクションを鑑みるに、いくつかの細部では伝わりにくいところがあったと推測できる。ひとつは、場面転換に失敗した場面で、もうひとつが終わり方である。

前者は、日本で事前準備の時間が十分とれなかったこともあり、備品の籠（そこから3つの丘が生まれるはずの！）が舞台の転換に紛れて紛失してしまったことがある。そしてそれとも関係して、最終シーンの事前の展開の説明ができなかった。また最終シーンは、歌と踊りで構成された印象的なシーンであるが、その話の展開は歌の歌詞を理解できないと同じアクションの繰り返しにも見えるため、どこでシーンが終わるのか、一般の観客には理解しがたかったようである。実際、正しく手拍子ができたのは、日本在住のフィジー人の方がたのみであった。